

ゆかたの着装を通して日本文化にふれる取り組み(2)

—日本の伝統文化紹介ツールの作成と活用—

有友愛子 藻利國恵 佐坂佳晃 柴崎功士 廣瀬由美

太田康子 寺井 寛 西分貴徳 坂口嘉菜

本校中学部では、ゆかたの着装を通して日本文化にふれる学習を総合的な学習の時間と関連づけた横断的な取り組みとして継続して行っている。平成26・27年度は従来の取り組みを発展させ、外部から招待者を招き学習したことを伝える場として和のもてなしに取り組んだ。日本の伝統文化を紹介するためのツールとして、タブレットPC上で活用する『和のおもてなしカード』を情報の時間に作成し活用した。『和のおもてなしカード』は、和のもてなしのプレゼンテーションにおいて動画等を活用した説明の場面で効果的に用いられ、プレゼンテーションを行う側、受ける側の双方にとって役立ち、有用性の高いものであった。自作ツールの作成と活用を通じた協働的な学習が、思考力や表現力の高まりにつながった。

【キーワード】ゆかた 着付け 伝統文化 タブレットPC 自作教材

1 はじめに

2020年に東京オリンピックの開催が決定し、国際教育の推進に向けた取り組みが今まで以上に活発になっている。グローバル社会に生きる児童・生徒達が、自国の文化を理解し大切にしようとする態度を養うことをねらいとして、学校教育においてもゆかたの着装や茶道体験等が行われることが増えている。また、海外からの観光客に向けた日本の伝統文化の体験が充実すると共に、海外で日本の伝統文化を体験できる機会も増え、日本の伝統文化を海外の方に発信するニーズが高まっている。

本校中学部では、平成23年度から総合的な学習の時間、国語、音楽、家庭科のクロスカリキュラムを組み「和の時間」の学習に取り組んでいる。家庭科のゆかたの着装の発展学習として、ゆかたを着装して「和楽器(箏)を演奏する」「抹茶を点てる(点茶)」「短歌を詠む」「俳句を詠む」等の体験学習を行っている。前報において、生徒らは意欲的に取り組み、ゆかたを着装して日本文化にふれることで、日本の

衣服文化や伝統的な生活について興味・関心を持つきっかけになったと報告している。

平成26年度及び27年度は、従来の「和の時間」の学習を発展させ、お客様を招いた和のもてなしに取り組むことにした。姉妹校提携を結んでいるフランスのパリ聾学校の生徒、保護者、職場体験や生徒会主催の学習会でお世話になった地域の方々、寄宿舎指導員の先生やイングリッシュルームでお世話になっているALT等を招き、自分達が学習したことを披露し伝える場とすることにした。そこで、日本の伝統文化を紹介するためのツールであるタブレットPC上で活用する『和のおもてなしカード』を情報の時間に作成し活用することにした。

本報告では、日本の伝統文化を紹介するためのツールであるタブレットPC上で活用する『和のおもてなしカード』に着目し、生徒によるこのツールの作成と和のもてなしにおける活用の様子について報告する。

2 学習の位置付けとねらい

「和の時間」の学習の位置付けを図1に示した。家庭科では和服(ゆかた)の着装、音楽では和楽器(箏)の演奏、総合的な学習の時間では点茶、国語では短歌・俳句等の学習をそれぞれ行っている。これらの学習で学んだことを、総合的な学習の時間に和のもてなしとして招待した方々に伝えることを通して、日本の伝統文化に対する理解を深めることをねらいとした。

日本の伝統文化を紹介するためのツールであるタブレットPC上で活用する『和のおもてなしカード』(以下、紹介ツール)を作成した情報の時間とは、情報教育推進のため学部独自に設定している時間である。週2時間の総合的な学習の時間のうち1時間を情報の時間として設定し、各教科との連携を密にした取り組みを行っている。

対象は中学部3学年とし、平成26年度14名、平成27年度14名であった。招待者を招くことで、生徒が学習に主体性を持って取り組むことをめざした。招待者として、平成26年度は、姉妹校提携を結んでいるパリ聾学校の生徒5名、保護者13名を招いた。また、平成27年度は、職場体験や生徒会主催の学習会でお世話になった地域の方々、「卒業生の話を聞く会」の講師の卒業生(大学生)、寄宿舎指導員の先生やイングリッシュルームでお世話になっているALT等7名を招いた。



<評価方法>ワークシートの記述内容と自己評価、成果物等
図1 学習の位置付け

3 『和のおもてなしカード』の作成

紹介ツールの作成は、平成25年度に「和の時間」に取り組んだ3学年の生徒達が、タイの大学生が来校した際の交流会で活用した紙媒体の紹介カードを拡充する形として始まった。紹介カードの内容は、箏の演奏と点茶について、生徒達が英語の授業で英訳したものである。タイの大学生へのプレゼンテーションで活用し、お互いのコミュニケーションを補う手段として有効に活用された(図2)。お土産として持ち帰ってもらったところ大変喜ばれ、生徒達は英訳やプレゼンテーションに一生懸命取り組んだ甲斐があったと手応えを感じている様子が見られた。



図2 タイの大学生に抹茶の飲み方を説明する様子

さらに、この英訳された紹介カードに動画を加え、タブレットPCで活用することができる『和のおもてなしカード』とすることで、活用の場面が広がり効果的な活用が期待できると考えた。平成26年度はフランスの聾学校の生徒に日本の伝統文化への興味・関心をもってもらうことをねらいとし、平成27年度は異なる言語を用いる海外の方に限らず、地域の方々や卒業生等、対象者を限らず活用することをねらいとして作成と活用に取り組んだ。

紹介カードの構成を図3に示した。ゆかたの着付け・和楽器(箏)の演奏・点茶の3章から成るよう構成した。3~4人ずつのグループに分かれ、担当の章の作成に取り組んだ。



図3 『和のおもてなしカード』の構成

紹介ツールの作成と活用に関する授業デザインを図4に示した。クロスカリキュラムとして、それぞれの教科で学習した内容をもとに、『和のおもてなしカード』の作成・タブレットPCを用いたプレゼンテーション・学習の振り返りの3つの学習活動による課題解決型の授業をデザインした。日本の伝統文化を紹介するという課題に対して、情報の収集と整理・表現・振り返りによる協働的な学習に取り組み、思考力や表現力の高まりをねらいとした。学習の評価は、ワークシートの記述内容や自己評価、成果物等で行った。



図4 『和のおもてなしカード』の作成と活用の授業デザイン

4 「和の時間」和のもてなしの内容

表1に「和の時間」和のもてなしの進行を示した。紹介カードの活用場面は、主に①生徒による招待者へのゆかたの着付け、③箏の説明、④点茶の説明と生徒による点茶のもてなし、⑤体験コーナー（箏・点茶）を想定して作成した。

表1 「和の時間」和のもてなしの内容

活動内容
①生徒による招待者へのゆかたの着付け
②はじめの挨拶
③箏の説明と生徒による箏の演奏
④点茶の説明と生徒による点茶のもてなし
⑤体験コーナー（箏・点茶）
⑥「和の時間」を振り返って俳句を詠む
⑦おわりの挨拶

パリ聾学校の生徒やイギリス出身のALT、職場体験でお世話になった台湾出身の台湾料理店の方等、海外の出身でゆかたを着る機会があまりない方や大学生や寄宿舎指導員の先生等、ゆかたを着て「和の

時間」に参加することを希望してくださった方に対して、「和の時間」の授業が始まる前に生徒がゆかたを着付け、生徒と一緒にゆかたを着装して日本の伝統文化にふれていただいた（図5）。



図5 ALTにゆかたを着付ける様子

5 取り組みの様子

(1) 紹介ツール『和のおもてなしカード』の作成

①平成26年度の取り組みの様子

フランスの聾学校の生徒に日本の伝統文化への興味・関心を持ってもらうことをねらいとした平成26年度は、家庭科や音楽で学んだ知識や技能を生かして、箏の弾き方や抹茶の点て方・いただき方等、説明に必要な情報について話し合わせた。必要に応じて、本やWebサイト等の参考資料を活用しながら、生徒がお互いに撮影者とモデルになり、紹介カードに必要な動画や静止画をタブレットPC (iPad) のカメラで撮影し、電子書籍作成アプリケーション (iBooks Author) で編集した。

情報の時間に行っている動画や静止画に合わせた短文作りやプレゼンテーションでの資料作り等の経験を思い起こし、効果的な伝え方を考えながら構成を練り、動画や静止画の撮影に取り組む様子が見られた。箏の演奏のページでは、和楽器独特の弦の数え方や箏爪のつけ方等、演奏体験に必要なと思う情報について、音楽の学習で自分達がどのようなことに戸惑ったのかを思い出しながら取り組む様子が見られた。点茶のページでは、自分達が点茶の練習で苦労した箇所について静止画と動画で詳しく説明しようとする様子が見られた。抹茶の点て方だけではなく、いただき方の作法も独特のものだから取り入れて紹介しようと話し合う様子も見られた。

②平成27年度の取り組みの様子

異なる言語を用いる海外の方に限らず、地域の方や卒業生等、対象者を限らず活用できる紹介ツール

の作成をねらいとした。前年度に上級生が作成した紹介カードを参考に自分達の考えを反映させた動画や静止画を撮影したり、上級生が紹介カードに加えた方が良いと考えた内容を加えたりしながら、紹介カードの拡充に取り組んだ。

上級生がどのような意図で構成を考えたのか、相手に伝えるためにどのような工夫が成されているのか等を汲み取りながら、手直しをしたい箇所や新たに追加したい箇所について相談しあう様子が見られた。また、自分達が説明をするのだから、上級生の動画を参考に自分達で動画を撮影する様子も見られた。参考資料とした『教本 手話きつけ』のなかに着付けた相手に対して着心地を問う手話表現が紹介されていた。和のおもてなしとして、招待者にゆかたを着付ける担当するグループの生徒達は、相手が自分達の着付けにどのように感じるのかが心配な様子であり、着心地を問うページを加えようと教本を参考にしながらページの作成に取り組む様子が見られた(図6)。



図6 着心地を問うページの撮影に取り組む様子

(2) タブレット PC を用いたプレゼンテーション

招待者1人に対して本校の生徒2～3人が担当し、グループごとにタブレット PC (iPad) を1台ずつ用いてプレゼンテーションに取り組んだ。タブレット PC の電子書籍アプリケーション (iBooks) に保存された自作の紹介カードを用いて、和楽器(箏)の演奏と点茶のプレゼンテーションに取り組んだ。情報の学習で取り組んでいる、学んだことを伝えるためのスキルを生かす場であることを意識させ、相手の反応やその場の状況に応じた臨機応変な対応を心掛けて取り組ませた。また、海外の方とのプレゼンテーションを通して、グローバルな視点で情報を伝えるためのスキルについて考えさせた。

①平成 26 年度の取り組みの様子

招待者を招いた和のもてなしは初めての取り組みだったこと、招待者が異なる言語を用いるフランスの生徒だったこと等不安な様子も見られたが、招待者を目の前にすると今まで取り組んできた成果を伝えようと気持ちを切り替えて取り組む様子が見られた。1人の生徒の説明に合わせてもう1人の生徒がタブレット PC の紹介ツールのページを示す等、グループでサポートし合って取り組む様子も見られた。

和楽器(箏)の演奏体験では、はじめは箏爪のつけ方を教えることで手一杯であったが、紹介ツールを活用して身振りや手振りを加えて説明したり、フランスの聾学校の生徒の手をとって爪で弦を弾く感覚を体験してもらったりと、相手の反応に合わせてながら効果的な活用方法をその場で工夫することができた(図7)。

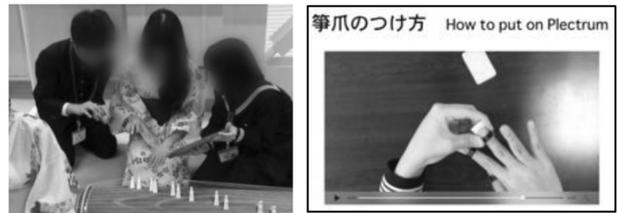


図7 和楽器(箏)のプレゼンテーションの様子

点茶のもてなしや体験でのプレゼンテーションでは、初めて抹茶を飲んだり、点てたりする相手の様子をうかがいながら、手順に沿って紹介ツールを活用し、プレゼンテーションを進める様子が見られた(図8)。

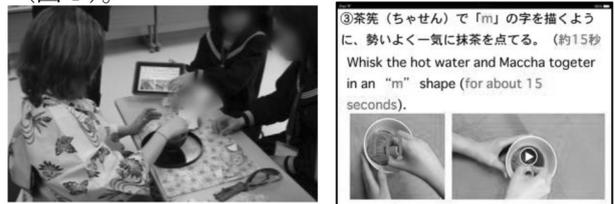


図8 点茶のプレゼンテーションの様子

フランスの聾学校の生徒からは、「抹茶を点てたり、箏を弾いたりすることは初めての経験だったけれどすごく楽しかった」「抹茶を点てることはすごく面白かった。箏の演奏は少し難しかった」等の感想を得た。また、引率教諭からは、「フランスでも日本の伝統文化についてふれることはできるが、本当の日本の文化にふれるのは今日が初めてだったので生徒に

とって発見があり、良い経験になった」との感想を得た。日本の伝統文化とおもてなしの気持ちを伝えることができ、達成感と自信を得ることができた。

保護者への和のもてなしでは、はじめは照れながら取り組む様子も見られたが、点茶のプレゼンテーションが始まると、フランスの聾学校の生徒へのプレゼンテーションの経験を思い起こし、美味しいと言ってもらえるよう心を込めて取り組む様子や学習したことを思い起こしながら保護者からの質問に答える様子が見られた。

②平成 27 年度の取り組みの様子

前年度の取り組みの様子を上級生から聞いたり、学習の導入として説明したりしていたため、生徒達も和のもてなしのイメージを持って取り組めた。はじめは緊張していたが、上級生を見習って取り組もうとする様子が見られた。

和楽器（箏）の演奏体験でのプレゼンテーションでは、相手の様子を見て紹介ツールのどのページを用いて説明するかを考えながら取り組む様子が見られた（図9）。

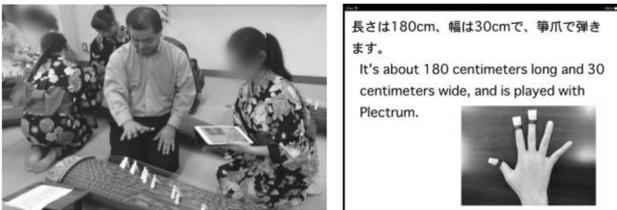


図9 和楽器（箏）のプレゼンテーションの様子

また、箏の演奏が得意な招待者から演奏をして欲しいとのリクエストがあり、生徒が箏の演奏をして招待者からアドバイスをいただく様子も見られた。

点茶のもてなしや体験でのプレゼンテーションでは、初めて点茶に挑戦するALTには紹介ツールを1つ1つ丁寧に提示しながら取り組む様子が見られた。一方、点茶の経験がある相手に対しては反応を見ながら何についてどのような説明をしようかとグループ内で相談し、楽しい時間を過ごしてもらえるよう工夫する様子が見られた。

体験コーナーでは、時間に余裕があったグループが、「おはしょり」等和服独特の手話表現や着心地の問い方等、着付けに関する手話を説明していた。招

待者の方が手話についての知識があったため、「なぜそのような表現をするのだろう」との質問を受け、自分なりの解釈を説明する様子が見られた（図10）。



図10 着付けに関する手話のプレゼンテーション

紹介カードはグループごとに分担して作成したため、他のグループが作成したページを使用する際はどのような意図で作られたのか、どのような活用をすると伝わりやすいのかをその場で考えながら、臨機応変にプレゼンテーションに取り組むことができ、紹介ツールの作成と活用を通じた思考力・表現力の高まりが見られた。

(3) 学習の振り返り

①平成 26 年度の取り組みの様子

平成 26 年度はフランスのパリ聾学校の生徒とのプレゼンテーションを振り返り、①どのようなことに気を付けて取り組んだか、②どのような気持ちだったか、③どのような不安があったか、④パリ聾学校の人はどのような気持ちだったと思うかの4項目について考えさせた。1人1台タブレットPC (iPad) を用い、プレゼンテーション用アプリケーション (Key Note) を活用してスライドにまとめた。プレゼンテーションに取り組んだ際の画像をスライドに挿入し、項目ごとに色分けをした吹き出しに整理させた。生徒それぞれの振り返りの内容を電子黒板に提示して考えを共有し合い、カードのブラッシュアップに向けて意見を交換し、平成 27 年度の取り組みではこれらの意見を反映させた。

②平成 27 年度の取り組みの様子

平成 27 年度は、グループごとにプレゼンテーションを通して気付いたことや疑問に思ったことをあげさせ共有した。着付けに関する内容については、ゆかたの着装に関する学習の前と後の知識の変化を自由記述で比較した後、和服や着付けに関して疑問に思ったことをまとめさせた。それぞれの生徒がまと

めた内容を共有し、紹介カードにこれらの情報を加えるため専門家に質問して解決することを目指して整理する等、次年度以降の学習に生かすための準備につなげることができた。

6 考察

(1) 和のもてなしに取り組む姿勢

日本の伝統文化の紹介の学習に取り組む姿勢について、生徒及び招待者（平成26年度は保護者、平成27年度は外部の方）に五件法で質問した。

生徒の結果を図11に示した。「とても積極的だった」「積極的だった」と答えた生徒は、平成26年度は1回目のフランスの聾学校の生徒との取り組みが85.7%、2回目の保護者との取り組みが92.9%、平成27年度の外部の方との取り組みは84.7%であり、8割以上の生徒が積極的に取り組む様子が見えてきた。

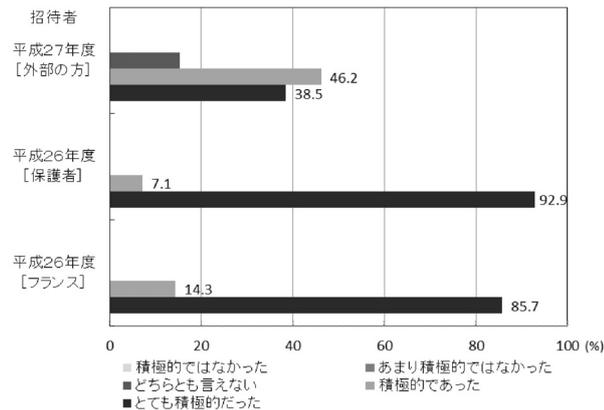


図11 和のもてなしに取り組む姿勢 (生徒)

生徒の結果と招待者に対して生徒の取り組む姿勢について五件法で質問した結果を比較した(図12)。平成26年度・平成27年度共に、招待者からしても生徒が「とても積極的」「積極的」に日本の伝統文化の紹介の学習に取り組んでいたと評価された。その割合は生徒の自己評価とほぼ同じ割合であった。外部の方からは、「一人一人が楽しんでほしい」というおもてなしの気持ちを持っているのが伝わってきた。「分からないところを聞くと、積極的に説明してくれた」「とても親切にエスコートして頂き、楽しい時間でした」等の理由があげられていた。保護者からは、「タブレットで浴衣の着方、点茶、箏の演奏等について詳しく説明してくれました」「お母さん

に教えたいという気持ちが伝わってきました」「おもてなしの心を感じとれた」等の理由があげられていた。

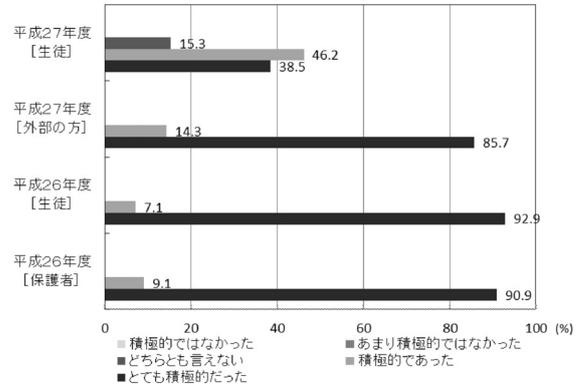


図12 和のもてなしに取り組む姿勢 (生徒と招待者)

これらの結果から、生徒らは日本の伝統文化の紹介の学習に取り組む意欲が高く、その意欲は保護者だけではなく、地域の方々や卒業生、ALTにも伝わったと言える。

(2) 日本の伝統文化紹介ツールの有用性

①日本の伝統文化紹介ツールの活用場面

タブレット PC 上で用いる日本の伝統文化紹介ツールが和のもてなしのどのような場面で活用されたかについて、生徒と招待者にそれぞれ自由記述で回答してもらい、KJ法で分類した(図13)。

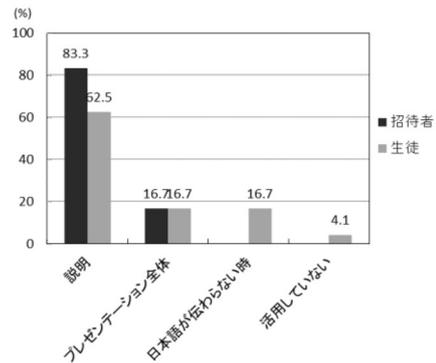


図13 紹介ツールの活用場面

その結果、62.5%の生徒が説明の際に紹介ツールを用いていたが、全て自分で説明することができたので活用しなかったと答えた生徒もいた。説明の際には、見本の動画を見せる、説明の補足をする等、紹介ツールをプレゼンテーションの補助手段として用いていることが分かった。なかには、自分が説明の内容を忘れてしまった時の確認に用いたという生徒

もいた。また、フランスの聾学校の生徒やALT等、日本語では伝わらない時にコミュニケーションの媒介として用いていることもわかった。日本の伝統文化の紹介を受けた側の招待者からは、説明の際に用いていたという回答が83.3%と最も多かった。「説明の時に写真だけではなく、動画で細かいところを映していて、手元の様子が非常にわかりやすかった」「タブレットを複数使うことでスムーズな交代や各自でも確認ができた」等の理由があげられていた。

これらの結果から、日本の伝統文化の紹介ツールはプレゼンテーションにおいて動画等を活用した説明の場面で効果的に用いられたと言える。

②日本の伝統文化紹介ツールの有用性

日本の伝統文化紹介ツール『和のおもてなしカード』の和のもてなしにおける有用性について、五件法で質問した。結果を図14に示した。

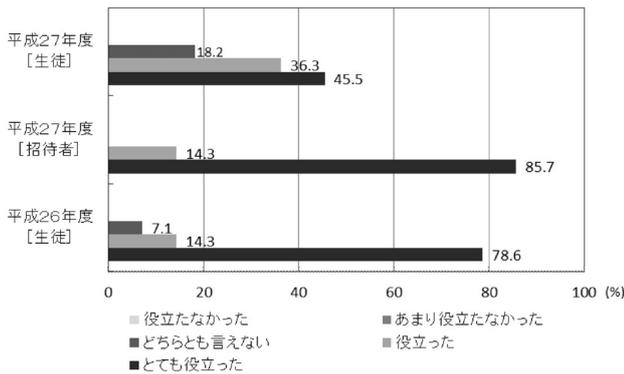


図14 日本の伝統文化紹介ツールの有用性

紹介ツールが役立ったかについて質問したところ、生徒は、平成26年度は92.9%、平成27年度は81.8%が「とても役立った」「役立った」と答えていた。その理由として、平成26年度のフランスの聾学校の生徒を招いた取り組みでは、「言葉だけではわからないこともカードを使えば理解してもらうことができた」「自分でもすぐに確認できる」「説明が楽になった」等の理由があげられていた。また、平成27年度の招待者を招いた取り組みでは、「説明しながら実際に見本を見せる時に役立った」「ALTとのコミュニケーションでも写真を見せることができたので助かった」「英語も入っていたので、皆が見ていてわかりやすかった」等の理由があげられていた。

また、平成27年度の生徒と招待者の結果を比較し

たところ、生徒も招待者も約8割が「とても役立った」「役立った」と答えていた。招待者からは、「わかりやすかった」「動画も見られてわかりやすかった」等の理由があげられていた。

これらの結果から、日本の伝統文化紹介ツールがプレゼンテーションを行う側、受ける側の双方にとって役立ち、有用性が高いものであったと言える。

(3) ゆかたの着装を通じた取り組みを通して

本報告は、ゆかたを着装して日本文化にふれることで、より日本の衣文化や伝統的な生活について興味・関心を高めることをねらいとした取り組みである。平成23年度から平成27年度までの「和の時間」の取り組み後に、「ゆかたの着装に取り組む姿勢」について五件法で質問した。結果を図15に示した。いずれの年度においても約7割の生徒が「とても積極的だった」「積極的であった」と回答していた。その理由に、「ゆかたは動きにくい」「実はあまりゆかたは好きではないけれど、こういう体験は少ないのでよかった」とあげた生徒もいたが、「ゆかたを着る機会があまりなかったので、日本のことを知れて良かった」と言った肯定的な内容が多くみられた。

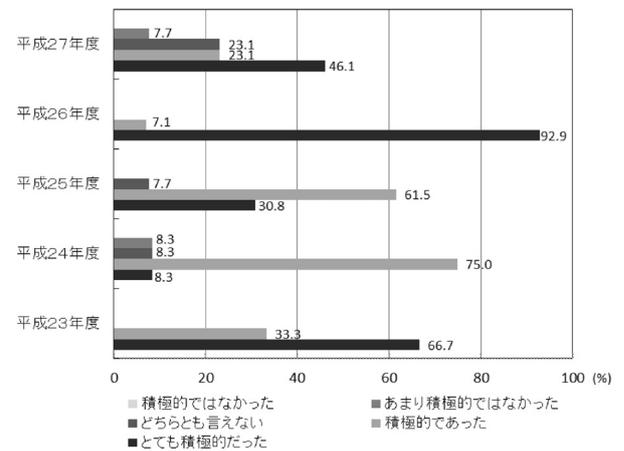


図15 ゆかたの着装に取り組む姿勢

これらの結果から、生徒達はゆかたを着装して日本文化にふれる取り組みに意欲的であったと言える。保護者からの「洋装とは違う大人びた表情を見ることができました。これからも伝統や文化を学んでいく事は大切だと思うので、ぜひ続けていって欲しい」という感想をはじめとして、生徒からもこの取り組みを継続して欲しいという声が多くあがっている。

7 まとめ

日本の伝統文化を紹介するツールは、和のもてなしのプレゼンテーションにおいて動画等を活用した説明の場面で効果的に用いられ、プレゼンテーションを行う側、受ける側の双方にとって役立つ有用性の高いものであると言える。紹介カードを軸とした情報の収集と整理・表現・振り返りによる協働的な学習が思考力や表現力の高まりにつながった。

「和の時間」の取り組みがフランスの聾学校の生徒へのプレゼンテーションをきっかけに招待者を招いた和のもてなしの学習に発展し、その対象を保護者やお世話になった地域の方々等外部の方に広げることができた。外部の方を招くことで生徒の主体性が高まり、客観的な評価を得ることで自己評価の高まりにつながった。招待者から、「日本の文化を他者に伝えるということは、生徒達にとっても自分の引き出しが増える良い機会ですね」との感想を得た。生徒が詠んだ俳句や招待者へのお礼状の内容にも見られたが、ゆかたを着装することでいつもとは違う立ち居振る舞いのなか、改まった気持ちで日本文化に向き合うことができ、生徒にとって新たに日本の文化を感じる機会となった。

今後は、振り返りの学習でプレゼンテーションを通して生徒それぞれが感じたことや学んだことを共有する方法について検討し、紹介ツールの拡充に向けて専門家からの学びを反映させる等、より充実した取り組みになるよう授業デザインに取り組みたい。国内外に関わらず活用できる日本の伝統文化紹介ツールの作成と活用に取り組んでいきたい。

付記

本報告の取り組みの一部は、「国際交流学習における日本の伝統文化紹介ツールの作成と活用」と題し、一般社団法人日本教育情報化振興会 (JAPET&CEC) が主催する「ICT夢コンテスト2014」において、日本教育情報化振興会奨励賞を受賞した。また、JAPET&CEC 成果発表会 平成26年度「教育の情報化」推進フォーラムにおいて、有友が事例発表を行った。

参考資料

- 『「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発ー「きもの」の着装を含む体験学習と海外への発信ー』（文化ファッション研究機構・服飾拠点共同研究 20014）
<http://kimono-bunka.ynu.ac.jp/>
 『教本 手話きつけ』（西尾啓江, 小林豊子きもの学院）
 『テーブル茶道教本』（一般社団法人 日本テーブル茶道協会）
 『お茶のこと 抹茶』一保堂茶舗 Web サイト
<http://www.ippodo-tea.co.jp/tea/index.html>
 『箏入門の手引き』（島津成悠, 成和会）

参考文献

- 有友愛子 (2012) ゆかたの着装を通して日本文化にふれる取り組みー総合的な学習の時間と関連づけた学習としてー, 聴覚障害 5 vol. 67, pp. 34-38, 聾教育研究会
- 有友愛子・古川日出夫・藻利國恵・田万幸子・渡邊明志・坂口嘉菜 (2013) ゆかたの着装を通して日本文化にふれる取り組み (1)ー教科の横断的な学びからー, 筑波大学附属聴覚特別支援学校研究紀要. 35, pp. 54-61.
- 有友愛子 (2015) 国際交流学習における日本の伝統文化紹介ツールの作成と活用, JAPET&CEC 成果発表会 平成26年度「教育の情報化」推進フォーラム, pp. 144-145, 一般社団法人 日本教育情報化振興会 (JAPET&CEC)
- 薩本弥生ら (2012) 「きもの」文化の伝承と発信をめざした授業実践報告書, 文部科学省委託事業「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」被服文化共同研究拠点における採択課題 『「きもの」文化の伝承と発信のための教育プログラムの開発ー「きもの」の着装を着装を含む体験学習と海外への発信ー』研究グループ (平成21-23年度)
- 扇澤美千子・川端博子・加藤順子・薩本弥生・斉藤秀子 (2013) ゆかたの着装体験を組み込んだ総合的な学習の時間の授業分析, 埼玉大学紀要 教育学部, 62(1), pp. 1-12.